

新美にいみ

南吉なんきち

—

月夜に七人の子どもが歩いておりました。

大きい子どもも小さい子どももまじっておりました。

月は、上から照らしておりました。子どもたちのかげは短く地べたにうつりました。

子どもたちはじぶんじぶんのかげをみて、ずいぶん大頭で、足が短いなあと思いました。

そこで、おかしくなって、笑い出す子もありました。あまりかっこうがよくないので二三歩はしってみる子

もありました。

こんな月夜には、子どもたちは何か夢ゆめみたいなおことを考えがちでありました。

子どもたちは小さい村から、半里はんりばかりはなれた本郷ほんごうへ、夜のお祭りをみにゆくところでした。

切通しをのぼると、かそかな春の夜風につて、ひゅうひやりりやと笛ふえの音ねが聞こえてきました。

子どもたちの足はしぜんにはよくなりました。

するとひとりの子どものおくれてしまいました。

「文六ぶんろくちゃん、早くこい」

とほかの子どもがよびました。

文六ちゃんは月の光でも、やせつぽちで、色の白い、眼玉めだまの大きいことのわかる子どもです。できるだけいそいでみんなに追いつこうとしました。

「んでもおれ、おつ母ちゃんの下駄げだだもん」

と、とうとう鼻をならしました。なるほど細長いあしのさきには大きな、おとなの下駄がはかれています。

本郷にはいるとまもなく、道ばたに下駄屋さんがあります。

子どもたちはその店にはいつてゆきました。文六ちゃんの下駄を買うのです。文六ちゃんのお母さんにたのまれたのです。

「あののい、おばさん」

と、義則君が口をとがらして下駄屋のおばさんにいいました。

「こいつのい、樽屋の清さの子どもだけどのい、下駄を一足やつとくれや。あとから、おっ母さんが銭もつてくるげなで」

みんなは、樽屋の清さの子どもがよくみえるように、まえへおしだしました。それは文六ちゃんでした。文

六ちゃんは二つばかりまばたきしてつつ立っていました。

おばさんは笑い出して、下駄を棚からおろしてくれました。

どの下駄が足によくあうかは、足にあててみなければわかりません。義則君が、お父さんかなんそのように、文六ちゃんの足に下駄をあてがってくれました。何しろ文六ちゃんは、ひとりきりの子どもで、甘えん坊でした。

ちょうど文六ちゃんが、新しい下駄をはいたときに、腰のまがったおばあさんが下駄屋さんにはいつてきました。そしておばあさんはふとこんなことをいうのでした。

「やれやれ、どこの子だか知らんが、晩げに新しい下駄をおろすと狐がつくというだに」

子どもたちはびっくりしておばあさんの顔を見ました。

「嘘だ、そんなこと」

とやがて義則君がいました。

「迷信だ」

とほかのひとりがいました。

それでも子どもたちの顔には何か心配な色がただよっていました。

「ようし、そいじゃ、おばさんがまじないしてやろう」

と、下駄屋のおばさんが口軽くいいました。

おばさんは、マッチを一本するまねして、文六ちゃんの新しいうらに、ちよつとさわりました。

「さあ、これでよし。これでもう、狐も狸もつきやせん」

そこで子どもたちは下駄屋さんを出ました。

子どもたちは綿菓子をつたべながら、稚児さんが二つの扇を、眼にもとまらぬはやさでまわしながら、舞台上で舞うのを見ていました。その稚児さんは、おしろいをぬりこくって顔をいろどっているけれど、よくみると、お多福湯のトネ子でありましたので、

「あれ、トネ子だよ、ふふ」

とささやきあつたりしました。

稚児さんを見てのにあくと、くらいところについて、鼠花火をはじめたり、かんしゃく玉を石垣にぶつかけたりしました。

舞台を照らすあかるい電燈には、虫がいつぱいきて、そのまわりをめぐるていました。みると、舞台の正面のひさしのすぐ下に、大きな、あか土色の蛾がぴたりはりついていました。

山車の鼻先のせまいところで、人形の三番叟がおどりはじめるころは、すこし、お宮の境内の人も少なくなつたようでした。花火や、ゴム風船の音もへつたよ

うでした。

子どもたちは山車の鼻の下にならんで、あおむいて、人形の顔をみていました。

人形はおとなも子どもともつかぬ顔をしています。その黒い眼は生きているとしか思えません。ときどき、またたきするのは、人形をおどらす人がうしろで糸をひくのです。子どもたちはそんなことはよく知っています。しかし、人形がまたたきすると、子どもたちは、なんだか、ものがなしのような、ぶきみなような気がします。

するととつぜん、パクツと人形が口をあきペロツと舌を出し、あつというまに、もとのように口をとじてしまいました。まっかな口の中でした。

これも、うしろで糸をひく人がやったことです。子どもたちはよく知っているのです。ひるまなら、子どもたちはおもしろがって、ゲラゲラ笑うのです。

けれど子どもたちは、いまは笑いませんでした。ち

ようちんの光の中で、——かげの多い光の中で、まるで生きている人間のように、まばたきしたり、ペロツと舌を出したりする人形……なんというぶきみなものでしょう。

——子どもたちは思い出しました、文六ちゃんの新しい下駄のことを。晩げに新しい下駄をおろすものは狐につかれるといったあのばあさんのことを。

子どもたちは、じぶんたちが、ながく遊びすぎたことにも気がつきました。じぶんたちにはこれから帰ってゆかねばならない、半里の、野中の道があったことにも気がつきました。

四

かえりも月夜でありました。

しかし、かえりの月夜は、なんとなくくつまらないも

のです。子どもたちは、だまって——ちょうどひとりひとりが、じぶんのこころの中をのぞいてでもいるように、だまって歩いていました。

切通し坂の上に来たとき、ひとりの子が、もうひとりの子の耳に口をよせて何かささやきました。するとささやかれた子は別の子のそばにいつて何かささやきました。その子はまた別の子にささやきました。——こうして、文六ちゃんのほか、子どもたちは何か一つのことを、耳から耳へいつたえしました。

それはこういうことだったのです、「下駄屋さんのおばさんは文六ちゃんの下駄に、ほんとうにマッチをすっておまじないをしゃしんだった。まねごとをしただけだった。」

それから子どもたちはまたひっそりして歩いてゆきました。ひっそりしているとき子どもたちは考えておりました。

——狐につかれるというのはどんなことかしらん。

文六ちゃんの中に狐がはいることだろうか。文六ちゃんの姿や形はそのままできて、心は狐になってしまふことだろうか。そうすると、いまもう、文六ちゃんは狐につかわれているかもしれないわけだ。文六ちゃんはだまっているからわからないが、心の中はもう狐になってしまっているかもしれないわけだ。

おなじ月夜で、おなじ野中の道では、だれでもおなじようなことを考えるものです。そこでみんなの足はしぜんにはやくくなりました。

ぐるりを低い桃の木でとりまかれた池のそばへ、道がきたときでした。子どもたちの中でだれかが、

「コン」
と小さい咳をしました。

ひっそりして歩いているときなので、みんなは、その小さい音でさえ、聞きおとすわけにはゆきませんでした。

そこで子どもたちは、いまの咳はだれがしたか、こ

っそり調べました。すると——文六ちゃんがしたということがわかりました。

文六ちゃんがコンと咳をした！ それなら、この咳にはとくべつの意味があるのではないかと子どもたちは考えました。よく考えてみるとそれは咳ではなかったようでした。狐の鳴き声のようでした。

「コン」

とまた文六ちゃんがいいました。

文六ちゃんは狐になってしまったと子どもたちは思いました。わたしたちの中には狐が一匹はいっている、みんなはおそろしく思いました。

五

樽屋の文六ちゃんの家は、みんなの家とはすこしはなれたところにありました。ひろい、みかん畑になっ

ている屋敷にかこわれて、一軒きり、谷地にぽつんと立っていました。子どもたちはいつも、水車のところからすこしまわりみちして、文六ちゃんを、その家の門口まで送ってやることにしていました。なぜなら、文六ちゃんは樽屋の清六さんのひとりきりのだじな坊ちゃん、甘えん坊だからです。文六ちゃんのお母さんが、よく、みかんやお菓子をみんなにくれて、文六ちゃんと遊んでやってくれたのみにくるからです。今晚も、お祭にゆくときには、その門口まで、文六ちゃんをむかえにいったのでした。

さてみんなは、とうとう、水車のところにきました。水車の横から細い道がわかれて草の中を下へおりてゆきます。それが文六ちゃんの家に行く道です。

ところが、今夜はだれも、文六ちゃんのことをわすれてしまったかのように、送ってゆこうとするものはありません。わすれたところではありません、文六ちゃんがこわいのです。

甘えん坊の文六ちゃんは、それでも、いつも親切な義則君だけは、こちらへきてくれるだろうと思って、うしろをむきむき、水車のかげになってゆきました。とうとう、だれも文六ちゃんといっしょにゆきませんでした。

さて文六ちゃんは、ひとりで、月にあかるい谷地へおりてゆく細道をくだりはじめました。どこかで、蛙かえるがくくみ声で鳴いていました。

文六ちゃんは、ここから、じぶんの家までは、もうじきだから、だれも送ってくれなくても、困るわけではないのです。だが、いつもは送ってくれたのです、今夜にかぎっておくってくれないのです。

文六ちゃんは、ぼけんとしているようでも、もうちゃんと知っているのです、みんなが、じぶんの下駄のことでなんといいかわしたか、また、じぶんが咳をしたためにどういうことになったかを。

祭にゆくまでは、あんなに、じぶんに親切にしてく

れたみんなが、じぶんが、夜新しい下駄をはいて狐にとりつかれたかshれないために、もうだれひとりかえりみてくれない、それが文六ちゃんにはなさけないのでした。

義則君なんか文六ちゃんより四年級も上だけれど親切な子で、いつもなら、文六ちゃんが寒そうにしていると、洋服の上に着ている羽織はおりをぬいでかしてくれたものでした（田舎いなかの少年は寒いとき、洋服の上に羽織を着ています）。それなのに、今夜は、文六ちゃんが、いくら咳をしても羽織をかしてやろうとはいいませんでした。

文六ちゃんの屋敷の外がこいになっている檜まきのいけがきのところにきました。背戸口せとぐちの方の小さい木戸をあけて中にはいりながら、文六ちゃんは、じぶんの小さい影法師かげぼしをみてふと、ある心配を感じました。

——ひよつとすると、じぶんはほんとうに狐につかれていたかもしれない、ということでした。そうする

と、お父さんやお母さんはじぶんをどうするだろうと
いうことでした。

六

お父さんが樽屋さんの組合へ行って、今晚はまだ帰
らないので、文六ちゃんとお母さんはさきにやすむこ
とになりました。

文六ちゃんは初等科三年生なのにまだお母さんとい
っしょにねるのです。ひとり子ごですからしかたないの
です。

「さあ、お祭の話を、母ちゃんにきかしておくれ」
とお母さんは、文六ちゃんのねまきのえりを合わせて
やりながらいいました。

文六ちゃんは、学校から帰れば学校のことを、町に
ゆけば町のことを、映画えいがをみてくれば映画のことをお

母さんにきかれるのです。文六ちゃんは話が下手です
から、ちぎれちぎれに話をします。それでもお母さん
は、とてもおもしろがって、よろこんで文六ちゃん
の話をきいてくれるのでした。

「神子みこさんね、あれよくみたら、お多福湯のトネ子だ
ったよ」

と文六ちゃんは話しました。

お母さんは、そうかい、と行って、おもしろそうに
笑って、

「それから、もうだれが出たかわからなかったかい」
とききました。

文六ちゃんはおもいだそうとするように、眼を大き
くみひらいて、じっとしていました。やがて、祭の
話はやめて、こんなことをいいだしました。

「母ちゃん、夜、新しい下駄おろすと、狐につかれ
る？」

お母さんは、文六ちゃんが何をいい出したかと思っ

て、しばらく、あっけにとられて文六ちゃんの顔をみていましたが、今晚、文六ちゃんの身の上に、おおよそそんなことが起こったか、けんとうがつかまりました。

「だれがそんなことをいった？」

文六ちゃんはむきになって、じぶんのさきの問いをくりかえしました。

「ほんと？」

「嘘だよ、そんなこと。むかしの人がそんなことをいっただけだよ」

「嘘だね？」

「嘘だとも」

「きつとだね」

「きつと」

しばらく文六ちゃんはだまっていました。だまっているあいだに、大きい眼玉が二度ぐるりぐるりとまわりました。それからいいました。

「もし、ほんとだったらどうする？」

「どうするって、何を？」

とお母さんがききかえました。

「もし、ぼくが、ほんとに狐になっちゃったらどうする？」

お母さんは、しんからおかしいように笑いだしました。

「ね、ね、ね、」

と文六ちゃんは、ちょっとてれくさいような顔をして、お母さんの胸を両手でぐんぐんおしました。

「そうさね」と、お母さんはちょっと考えていてからいいました、「そしたら、もう、家におくわけにやいかないね」

文六ちゃんは、それをきくと、さびしい顔つきをしました。

「そしたら、どこへゆく？」

「鴉根山の方にゆけば、いまでも狐がいるそうだから、そっちへゆくさ」

「母ちゃんや父ちゃんは どうする？」

するとお母さんは、おとなが子どもをからかうときにするように、たいへんまじめな顔で、しかつべらしく、

「父ちゃんと母ちゃんは相談をしてね、かあいい文六が、狐になってしまったから、わしたちもこの世になんのだのしみもなくなってしまうたで、人間をやめて、狐になることにきめますよ」

「父ちゃんも母ちゃんも狐になる？」

「そう、ふたりで、明日の晩げに下駄屋さんから新しい下駄を買ってきて、いっしょに狐になるね。そうして、文六ちゃんの狐をつれて鴉根の方へゆきましよう」

文六ちゃんは大きい眼をかがやかせて、

「鴉根って、西の方？」

「成岩から西南の方の山だよ」

「深い山？」

「松の木がはえているところだよ」

「猟師はいない？」

「猟師って鉄砲打ちのことかい？ 山の中だからいるかも知れんね」

「猟師が撃ちに来たら、母ちゃんどうしよう？」

「深い洞穴の中にはいって三人で小さくなっていればみつからないよ」

「でも、雪が降ると餌がなくなるでしょう。餌をひろいに出たとき猟師の犬にみつかったらどうしよう」

「そしたら、いっしょうけんめい走ってにげましよう」10

「でも、父ちゃんや母ちゃんははやいでいいけど、ぼくは子どもの狐だもん、おくれってしまうもん」

「父ちゃんと母ちゃんが両方から手をひっぱってあげるよ」

「そんなことをしてるうちに、犬がすぐうしろにきたら？」

お母さんはちょっとだまっていました。それから、ゆっくりいきました。もうしんからまじめな声でした。

「そしたら、母ちゃんは、びっこをひいてゆっくりいきましよう」

「どうして？」

「犬は母ちゃんにかみつくでしょう、そのうちに獵師がきて、母ちゃんをしばってゆくでしょう。そのあいだに、坊やお父ちゃんにげてしまうのだよ」

文六ちゃんはびっくりしてお母さんの顔をまじまじとみました。

「いやだよ、母ちゃん、そんなこと。そいじゃ、母ちゃんがなしになってしまっじゃないか」

「でも、そうするよりしようがないよ、母ちゃんはびっこをひきひきゆっくりゆくよ」

「いやだったら、母ちゃん。母ちゃんがなくなるじゃないか」

「でもそうするよりしようがないよ、母ちゃんは、びっこをひきひきゆっくりゆく……」

「いやだったら、いやだったら、いやだったら！」

文六ちゃんはわめきたてながら、お母さんの胸にしがみつきました。涙がどっと流れてきました。

お母さんも、ねまきのそででこっそり眼のふちをふきました、そして文六ちゃんがねとばした、小さい枕をひろって、あたまの下にあてがってやりました。

「狐」

※『新装版 新美南吉童話集 2 おじいさんのランプ』（2012年12月1日、大日本図書株式会社）の「狐」をもとに一部、漢字表示とルビを編集しました。